

「農村女性ネットワーク」にみる変革の志向性とその形成過程 ——「田舎のヒロインわくわくネットワーク」を事例に——

大石 和男

Kazuo OISHI: The Direction of Social and Domestic Changes through Networking Movements by Rural Women: A Case Study of the Rural Heroine Network

In the middle of the 1990s, a voluntary network founded by a group of rural women started an empowerment movement in Japan. They led this rural network movement for two decades. This network is a non-hierarchical and non-subsidized operation. On the contrary, the old style network for rural people had been influenced by the public sector, and in many cases, the network was limited to a local community.

This study targets the new women's movement called the Rural Heroine Network (RHN). The study aims to clarify the direction of women's thoughts that lead to social and domestic change through networking. In addition, the study specifies the process of maturation of these thoughts.

Six women who were part of the RHN were investigated and their life stories were assembled, with particular attention to their motivation to participate in the RHE, the process of thought development that aims to solve social and domestic problems, and their thought directions.

In conclusion, it is clear that in addition to gender issues, there are general problems related to the regional situation, food issues, and the suppression of agriculture. These issues tend to develop the women's minds as they pursue various social changes. Finally, three categories of their thoughts are specified based on the regional sector, the intended group, and domestic matters.

1. 思想としての「農村女性ネットワーク」

本稿では1994年に農村女性によって結成された「田舎のヒロインわくわくネットワーク」¹⁾（以下、Hと略記）に着目し、Hへの参加動機や社会に対する関心の向け方、および自己と社会の変革に向けた活動の展開方向について、参加者のライフ・ストーリーをもとに考察を行う。

このHは、古くからからみられる農村女性によるネットワーキングの主流形態、たとえば農協（JA）婦人部や地域婦人会、生活改善グループといった地縁型の団体を通じて得られるネットワークとは異なっており、階梯的な組織構成の原理をもたない、自発的でフラットな人間関係のネットワークとして誕生した。このメンバーの中には、後に女性議員や女性起業家などの形で注目を浴びるようになった人物が多数含まれており、90年代における農村女性のネットワーキング・ブームを生み出した先駆的な存在として注目を浴びた事例である。

このHが、現状打破（breakthrough）を求める農村女性の潜在的な欲求を掘り起こし、彼女たちの活動意欲に火をつける形となったことの経緯や活動展開については、すでに先行研究（大石、2007）においてその特異的な性格が明らかにされている一方で、この事例を普遍性という観点から分析しそこから一般的な特徴を析出することは、事例の性質を鑑みると容易ではない。そこで本稿では、事例の特性を逆手にとる形で、彼女たちの活動を「農村女性ネットワーク」という鍵概念によって触発された変革思想の一形態として捉えることとする。その際、思想には具体的な実践活動も含まれるものとする²⁾。まずは分析視点から述べてみたい。

研究対象として意図的に農村女性を取り上げる場合には、ジェンダー（史）論を念頭に置くことが常套であり、本稿においてもこのような視点を共有することは言うまでもない。しかしながら本稿が思想論の立場から実態分析を試みるのは、彼女たちの思想が、ジェンダー性を強く帯びた領域（たとえば婚家における義父母との関係、宿泊を伴う外出への家族の理解、など）に起因する動機や社会構造のみならず、一般的な社会問題や個人的な経験といった領域からも大きな影響を受けていると考えられるためである。むろん農村女性には今なおジェンダーにまつわる抑圧状況が残っており、これに対する状況改善の欲求が大きなウエイトを占めていることは確かである。しかしながら、だからといって農村女性の変革志向がすべてこの種の抑圧状況に対してのみ向けられているわけでもなければ、これらの要因のみで変革活動のすべてを説明できるわけでもない。むしろ彼女たちは、ジェンダーを含む多様な社会的・個人的問題を踏まえ、そこに各種の経験と個人的価値観を重ね合わせながら、変革思想を醸成させ、活動として展開しているのであり、これらの総体を把握する視点としての思想論的な接近法にも利点があると考ええる。

したがって本稿では、農村女性によって編み出されていった変革思想がどのような種類の問題領域に関心を寄せ、どのような動機や出来事を伴いつつ構築されていったのかについて、彼女たちの人生経験とそこに影響を及ぼした要素を把握しながら明らかにすることを目的とする。さらに言えばこの作業は、戦後日本における他の＜農＞的な変革思想、たとえば「有機農業」や「自給」などといった用語を伴う思想と同列の位置に「農村女性ネットワーク」を置き、現代における＜農＞的な変革思想としての位置性を明らかにする試みの一端であることを付記しておく。

2. 行研究の検討

（1）先行研究との比較にみる本事例の位置性

農村女性のネットワーキングと社会変革活動の結合を考えるに際しては、佐藤慶幸や天野正子らが1980～90年代に行っていた「生活クラブ生協」を巡る研究（たとえば佐藤ほか、

1995)が参考になる。この研究では「主婦」としての女性を中心とした生協活動において、ネットワークと社会変革活動が重要な活動の柱となっている実態について注目しており、本稿と比較的近い着眼点をもつ研究と言える。

この研究をもとに、本稿との事例の性格の違いを考えてみた場合、社会的属性の違い（都市部の「主婦」or 農村女性）に加えて、変革活動の準拠枠としての意味が両者で大きく異なっている点を挙げることができよう。「生活クラブ生協」では、メンバー（職員を含む）による社会変革運動は、基本的にこの組織の枠内にて行われるか、新たに枠内に取り込まれることによって遂行されていく。例外として「基礎自治体レベルで結成されている『生活者ネットワーク』」が取り組んだ「代理人運動」³⁾があり、こちらは組織形態に可変性を認めることができるものの、総体としてみるならば「生活クラブ生協」に関連した変革活動は、組織という活動枠組みに大きく規定されたものとして捉えられる。

これに対してHでは、2002年に発生した大規模食中毒事故の後に取り組まれた「雪印100株運動」のようにHが主導⁴⁾した例はあるものの、このような事例は多くなく、活動内容がおおむね3年に1回開催される全国集会を基軸としていることからわかるように、日々の細やかな実践活動を組織・運営していく体制はとってこなかった。それゆえに、各人がそれぞれの裁量において日常的に取り組む活動こそが重要となっており、Hはそのような活動の方向性を社会的な観点から模索・提案し、メンバー相互の交流を通じて刺激を享受し合い、各人の活動成果を披瀝する場として機能していた。そして全国に散らばった参加者たちは、各人の保有する活動資源を活かしながら、日常活動の中でさまざまな課題に取り組み、活動を練り上げて展開していったのである（大石、2007）。したがって参加者がこれらの自主的な活動を構築する際に、Hのもたらすネットワークは有用な資源にはなりえても、活動の枠組みを規定する力（＝準拠枠）とはならなかった。それゆえに、Hのもたらした「農村女性ネットワーク」という思想の影響力とその射程を把握しようとするならば、参加者の個人レベルでの変革活動を詳細に把握することが重要な作業となる。

（2）「農村女性ネットワーク」を巡る先行研究

本事例は、農村女性によるネットワーク・ブームの先駆けとなったこともあってジェンダー研究における先行研究でもいくつか取り上げられてきた。

まず鶴理恵子は、80年代以降の「農家女性の活動をとおして、女性たちがどのようにエンパワーしてきたのかに着目」しており、「活動に伴い、女性本人に、また家族・地域社会との間に生じるさまざまな葛藤や矛盾に、どのように対処してきたのか」について焦点を当てる。そして全国11の女性グループ（地域団体：9、全国ネットワーク：2）のひとつとしてHに着目しながら、活動上の規範の特質や、家・ムラとの緊張関係について考察を行っている（鶴、2007：202-222）。

これに対して原（福与）珠里は、パーソナルネットワーク論を用いた上で、①イエ・ムラ

論では捉えられない女性個人の社会関係や主観的な生活世界の抽出、②ネットワークの規定および阻害要因、③ネットワーキングにおける選択行為のもつ意味、等を研究課題に掲げ、事例の一部としてHの茨城支部の参加者を上げている。

また上記以外では、富士谷あつ子の『日本農業の女性学：男女共同参画社会とエコロジカル・ライフをめざして』にもHについての紹介がみられる（富士谷、2001）。

最後に大石和男（2007）では、ネットワーク結成当初にみられたエンパワメントへの指向性が後年になって薄れていき、代わりにさまざまな変革活動へと軸足を移していった様が明らかにされている。ただしその理由や詳しい実態については十分に解明されていないため、本稿では下記の課題を設定することによって、この論点の解明に貢献することを目指す。

3. 分析の方法について

（1）分析視点と研究課題

本研究では分析に際して参加者とHの関係性だけに論点を限定するのではなく、メンバーによる農的および社会的活動を含んだライフ・ストーリー全般についての聞き取りを行い、その上で自己と社会の変革思想がどのように醸成され、展開されてきたのかについて包括的な把握を試みる。その際、Hと参加者との関係性については、あくまでもライフ・ストーリー上のひとつの出来事として記述するに留め、関心の中心は変革思想の醸成過程に置くものとする。その上で、インフォーマントの有する変革指向性がどのような社会的・個人的領域に向けられているかについて、その傾向を明らかにすることを課題とする。

（2）調査対象

聞き取りはHのメンバーの中から農的および社会的な活動を顕著に認めることのできる人物を選定して実施し、本稿ではその中から活動内容の多様性を考慮しつつ6名について記述した。インフォーマントの概要および調査結果について表1に示してある。なおインフォーマントは仮名にしてあるが、比較的知名度のある人物も多く、匿名化する意味はあまりない⁵⁾。事例へのアクセスの利便性も考え、氏名以外の固有名詞については実名のままとした。データは2014～15年および2004年に行った調査内容を中心としつつ、それ以外の時期のデータも補足的に用いている。

表1 インフォーマントの基本属性

氏名（仮名）	珠美さん	歌子さん	仁美さん	希世子さん	典子さん	聖子さん
主要調査日	2014.03.18	2004.03.02/ 2014.03.19	2012.06.27/ 2014.12.16	2004.01.12/ 2015.03.11	2004.02.14/ 2014.01.25	2004.03.07/ 2015.03.05
生年	1944	1949	1951	1952	1944	1942
居住地	福岡県福岡市	熊本県熊本市	高知県四万十町	広島県三原市	長野県須坂	神奈川県藤沢市
周囲の環境	市街地	農村地帯	山村地帯	農村地帯	農村地帯	ほぼ市街地
※主な経営品目 （農畜産部門）	米・果樹（ブドウ・梅）・露地野菜	家：ミカン 会社：ミカン、ミカン加工	稲作、しいたけ、イチゴ	ホウレンソウ・春の七草→ハーブ→ベビーリーフ	果樹（ブドウ・サクランボ・リンゴ）	酪農→後に果樹（多品種）
※経営面積等	2ha 弱	家：4ha、 会社：60a	田1.4ha	田畑3.3ha	果樹園1ha	果樹園2.5ha
※夫婦の農業 従事形態	夫婦とも農業専従	夫婦とも農業専従	夫婦とも給与所得あり	夫婦とも農業専従	本人は農業専従で、夫は給与所得者	夫婦とも農業専従
加工・サービス 部門	直売所（加工場・研修所併設）	加工場	農家民宿	なし	（収穫体験）	直売所（加工場併設）
雇用	あり	あり	なし	あり	なし	なし
結婚形態	婚入	婚入	婿取り	婚入	婚入	婚入
（実家の形態）	農家	農家	（農家）	非農家	非農家	農家
都会生活経験	なし	なし	あり	あり	あり	なし
就職経験	あり	あり	あり	なし	あり	なし

注1）高齢化や世代継承の影響を取り除くため※印については対象者世代におけるピーク時の内容を記した。

出典：筆者調査結果より作成

4. メンバーによる変革活動の実態

（1）直売所を核とした変革活動 ―珠美さん（福岡）―

珠美さん（仮名）は都市農業を営むと同時に直売所の経営者でもある。彼女が仲間と設立した直売所は、地元はおろか全国的にも有名であり、その理由は自分たちで生産した農産物のみならず、九州一円にはりめぐらせたネットワークを駆使して優良な産物や応援したい加工品を取り寄せることで、質の高く特長のある販売品を取りそろえていることにある。店舗前にはイベント用のスペースも準備されており、筆者が訪れた日（2014年3月18日）は、熊本・天草地方の女性グループがオリジナルの高菜入り饅頭やジェラートなどを店頭販売しており、来客からも好評を得ていた。このように珠美さんは各地の生産者に販売の機会を提供することも多く、販売や加工の相談にも積極的に応じており、この日もグループの持参した商品を巡って盛んに意見が交わす様子が観察された。

さて珠美さんは、県内の農家に第6子として生まれた。高校卒業後に2年間就職した後に、見合いを経て結婚する。『全国農業新聞』に掲載された「農人伝」の記事によれば、『『あのあたりは都市化が進み、3年くらいしたら、農地を全部売ってしまわれるから、こんないい

縁談はない』と仲人さんが両親に勧めた」ことで「両親が結婚を決め」てしまったものの、夫となる予定の人物と会ったところ「『一度コンクリートにすれば緑に返らない。農業を継いだ以上、ずっと農業をやる』と言われてビックリした」という。とはいえ「『福岡市まで嫁に行くのに、百姓になるらしいよ』と陰口を言われ、里帰りのときには意地でも故郷に錦を飾りたいと思って」いたこともあって、「今振り返れば、たぶんこのときから、『プライドを持った農業者にならなければ』という思いを、夫とふたり、共有したのかも」しれないと述べている（榊田、2009）。彼女の結婚生活の開始時における心境がよくわかるエピソードと言えよう。

婚家では農作業の仕事が実家と比べて格段に忙しく、結婚当初は文字通り「10年間泣き続けた生活だった」⁶⁾という。財布も義父母が握っており、経営権に関しては最後まで子（＝珠美さんの夫）には譲らなかった。生活上の支出に関しては十分な金額を出してもらえたものの、自身の小遣いとなる金は少なく、子供の教育費まですべて義父母に頼らざるをえず、「給食費ぐらいは自分の金で払いたい」との思いが尽きなかったという。しかしながら珠美さんは、お金が自由にならなかった当時の生活を振り返って「だから良かった」とも言う。なぜなら、彼女は夫の病気をきっかけとして梅を導入し、梅干しへの加工を始めると共に、市場出荷一辺倒であったブドウの一部を転用して直売を開始し、夫婦の収入を確保できる体制を作り始めたからである。切実な思いに迫られて取り組んだ直売と食品加工の仕事があったからこそ、後年の直売所開設へと展開させる道筋が開けたと考えているのである。

40代に入ってから珠美さんの活動はJA系のグループ活動に向けられ、フレッシュミズ（若妻会）や女性部を通じて全国大会（「家の光全国大会」⁷⁾）での報告・入賞といった経験を得ている。彼女の提案でJA女性部に加工部も設立されたが、同じく提案した直売所については受け入れてもらえず、後年に自分達で直売所を設立することとなる。

もうひとつの見逃せない活動は、「婦人農業大学」の受講である。このときに出会った意欲的な女性6名と一緒に「みな月会」という任意団体を結成し、食品加工や簡単な直売活動を開始することとなった。時代は「バブル経済」と呼ばれる時代に突入しており、かつて農村地域だった自宅の周囲はすっかり宅地化され、そこで農業を続けることに対する圧力を強く感じる日々であったという。農業を続けるためには、意識的に農的アイデンティティを打ち出していかなければならない時代であり、彼女は共闘する仲間を「みな月会」という形で結成したのである。

実はこの頃から、珠美さんには将来の活動に向けたコンセプトを固めつつあった。それは、①農村女性の置かれた大変な境遇をなんとか改善したい、②農業を蔑む傾向をもつ人々を見返すための活動を起こしたい、というものである。そして仲間と折に触れて「都会の人の心を耕したい」という会話を交わしていた。それから12年を経て実現したのが直売所「ぶどう畑」（1999年）であった。

農村女性ネットワークHとの出会いもその間の重要な出来事であった。彼女の初参加は

第2回となる96年の集会であり、第1回集会（94年）に参加した同市内の農家女性の記事を読んで次の開催を待ち焦がれていたところ、新聞で第2回の開催案内を目にしたことで参加を決意する。当時は泊まりがけで外出することに対しては家族に気兼ねをせねばならず、両親と夫に謝罪を重ねることでようやく許しが得られたという。Hの集会は非常に刺激的で、珠美さんは感動のあまり「地方でもこのような集会を開催したい」と集会の場で宣言し、翌97年には九州版のH集会を開催し、約300人の参加者を得て成功を収める⁸⁾。彼女が九州一円にまたがる大きなネットワークを有しているのも、このときの集会が大きく寄与している。

同年には、「みな月会」メンバーを含む10名でフランスにグリーンツーリズムの視察にも出かけた（11日間）。そして現地農家の接客態度と農業に対する誇りに大きな感銘を受けた彼女は、帰国するや否や直売所を開設することを宣言し、家族を驚かせる。土地も担保もない状態からスタートした直売所の開設には多くの苦労話があるのだが、そのあたりは榊田（2005）や新開（2014）などで詳述されているため、ここでは結果だけ記しておく。当初、採算ラインを1億円と見積もった直売所は、土地を義父に提供してもらい、建物は夫が借金をした上で建設した。その上で「みな月会」から珠美さんを含む6名が有限会社「ぶどう畑」の設立に参加し、この会社が土地・建物を借りるという形で1999年に直売所がスタートする。2005年には早くも年商2億円を達成した。

彼女の名を高らしめているのは、まさにこの直売所の成功に負っている。2005年の第34回日本農業賞⁹⁾にて新設された特別部門「食の架け橋賞」で優秀賞を獲得した理由も、直売所の活動が「九州一円の意欲ある農業者のアンテナショップ」として機能しており、生産者と買い物客との対話も推し進めている点で、店舗が「都市と農村の架け橋」となっている（NHK 日本農業賞 Web サイト）と評価されたことによる。実際、経営者兼店長である珠美さんは自ら店頭に立って積極的に買い物客に声を掛けて回っており、対話の多い直売所を目指す彼女の姿勢は、来客の目から見ても明らかである。消費者組織「ぶどうの実」（会員約1400名）を立ち上げ、出荷者組織「ぶどうの樹」（会員約300名）に所属する生産者の圃場で収穫体験を行うなど、両者の交流の場も積極的に設けている。

また近年では、所有する畑の一部を利用して都市民に対する農作業体験の場「農業塾」（2007年）を開始し、翌年には農業生産法人「合同会社みな月」（2008年）を設立して非農家出身の若者でも農業に就くことのできる道を整備し、ハウス施設によるベビーリーフ栽培も開始した。このように、直売所を核に据えながら多方面で社会変革を追い求めている点に、彼女の社会変革に対する姿勢とその特長を見て取ることができる。

（2）ミカンを通じた地域振興 ―歌子さん（熊本）―

歌子さん（仮名）は、都市近郊に位置する県内有数のミカン産地にて農業を営んでいる。高校卒業後は洋裁学校に助手として通っており、その頃に彼女の存在を知ったこの地区の農

業者（＝その後の義父）から縁談の話を持ち込まれたのが結婚のきっかけである。兄と結婚相手とが元々友人であったことも関係しており、農家出身であった歌子さんにも農業を厭わない気持ちがあったため、彼女はこの申し出を承諾することにする。

婚家での彼女の立場は、義父によって見初められたという経緯によってほぼ決定づけられていた。ここで彼女の立場を示すエピソードを記しておこう。結婚して2週間が過ぎた頃、歌子さんはたまたま地元の農業者が鍬を担いで歩いている姿を見かけ、義父に「わが家にも鍬で行う農作業があるのですか」と尋ねた。その上で「もし鍬仕事があるのなら、私は実家に帰らせてもらいます」と宣言したのである。実は歌子さんの実家周辺では農業機械で畑を耕すことがすでに一般的となっており、彼女自身も鍬仕事はほとんどしたことがなく、何よりも苦手な仕事であった。農家に嫁いでおきながら、上記の発言は突拍子もない発言であると思わざるを得ないが、しかし話を聞いた義父は2日後には農業機械を買いそろえてくれたのだという。他人には厳しい人であったという義父も、彼女に対しては非常に寛容であったことがわかる。

算盤ができたので税金申告の準備を手伝いだして2年目に、義父に対して「いつまで親方（＝経営権）をもつのですか」と尋ねたところ、彼から「代わろうか」と打診されたことで、早い時期からサイフも任されるようになった。結婚後3～4年目の話である。このように早い時期から歌子さん夫婦に経営の実権が渡された背景として、義父は戦前から海軍に在籍しており、高位の立場にいたという経歴と関係する。彼女から見た義父は「好奇心旺盛で、百姓らしさのない人」であった。お金のことでうるさく言うこともなく、地域のいろんな役職をしていたこともあり、だからこそ農業経営主としての立場に固執することなく、すんなりと若夫婦に経営移譲を行う気になったものと思われる。一般的な農家とはやや家風の異なった家庭環境にあったと言えよう。

ところで歌子さんと話をしていると、しばしば「（地元である）河内¹⁰⁾を良くしたい」という発言が出てくる。このような意識はどのようにして生まれたのであろうか。彼女はこの点に関して、実家の長兄の影響を強く受けていると言う。一回りほど年齢の違う兄も地域の役職をよく引き受けており、地域の将来を話し合うためにやってくる来客も多く、そのような人々にお茶を出すことを通じて、歌子さんは兄たちの動向をよく知る位置にあった。当時の兄たちの活動のひとつに「ミカンを作れば、役場の部長クラスの収入も達成できる」と言い広めて、地域にミカン園の開墾ブームを巻き起こしたことが挙げられる。この地域のミカン生産の動向について記している川久保篤志によれば、同地区において1950年に266haだったミカン園の面積は20年後の1970年には約5倍の1329haに、また農家1戸あたりの平均栽培面積も0.36haから1.09haへと3倍に拡大したという（川久保、2006）。彼女の兄たちは、まさにこのような動きを主導した人々だったのである。

ところがミカン園の拡大は、農業基本法（1961年）での「選択的拡大」という方針を受けて全国的に進められた動きでもあり、この地域だけに限った話ではなかった。ミカン増産

の流れは必然的に生産量の拡大と価格の下落を招くこととなり、72年には価格の暴落を引き起こし、その後も園地再編の取り組みが始まる70年代後半まで価格は下がり続ける（香月・高橋、1995）。兄とその仲間（約10名）もこの波をかぶり、借金まみれとなる。歌子さんの「地域のため」という思いの原点は、この兄たちの苦労してきた姿にあった。応援してくれた人々のためにも、農業できちんと所得を確保でき、後継者が安心して就農できるような仕組みを作りたいと考えるようになったのだと彼女は語る。歌子さんが結婚して間もない頃の話である。

彼女が対外的な活動を開始したのは、1998年（49歳）頃からであった。JA 女性部の仲間に誘われて、先述した九州版 H 集会（97年）に参加したところ、「変わった人が多くて安心した」との印象を抱くことになり、自分と似た感性をもつ農村女性が少なくないことに勇気づけられたのもこの頃である。それと同時に、海外研修の経験をもつ女性の存在にも気づかされ、JA 熊本市女性部の副部長時代に研修制度（2000年）を設け、初年度の中国訪問を皮切りに毎年20～30名の部員に海外研修の機会を提供する体制を築いたのも彼女である。

Hの全国集会に参加したのは第3回（1999年）であり、このときに出会ったH代表のyさん（福井県）の農場にも何度か個人的に訪問し、県からグリーンツーリズムに関する検討・推進の役務を打診された際（2006年）にもアドバイスを受けている。

歌子さんの活動の基本コンセプトは、地元産ミカンを用いた特産品開発と地域振興であり、2001年には地域内の女性農業者に呼びかけて1人5万円の出資金で「フレッシュ河内グループ」を結成し、「安心」「安全」「無駄をなくす」を合い言葉に、ミカンの加工品作りと販売活動を開始した（結成当初47名）。この頃から未熟な青ミカンに含まれる成分の効能にも注目するようになり、これを製品化した青ミカンジュースは熊本県優良新商品として金賞を受賞した（2005年）。さらに2007年には、より機動的な活動展開を行うために、歌子さんを含む5名で「株式会社オレンジブロッサム」を設立する。同社のWebサイトに掲載された設立目的には「女性の自立と豊かさをテーマに、地域の農水産物に付加価値を付け、河内地域全体の振興と活性化を目指した」（株式会社オレンジブロッサム Web）とあり、経済活動を通じた地域振興が強く意識されていることがわかる。香水への関心から南フランスに研修（2002年）に出かけた結果、柑橘の花のアロマ効果にも着目することとなり、同年春にはみかんの花摘みイベント¹¹⁾を開催する。彼女のミカンへの着目は一般的な可食部のみならず、果皮や花にまで及んでおり、その加工品は花を用いた紅茶や、青ミカン果汁を用いた飴、ジュース、ノンアルコール・ビールなど多岐にわたる。原料ミカンはほとんど農薬を使わずに栽培され、「有作くん」（熊本型特別栽培農産物）の認証も受けるなど、安全性に対する配慮もされている。

このようにミカンとその加工品開発を基軸とし、経済性の確立を強く意識しながらも、同時に農村女性の活動の場を創出し続け、地域振興のための活動にも骨身を惜しまない点に、歌野さんの活動スタイルを見て取ることができる。

（３）地域資源に気づかされて農家民宿へ ―仁美さん（高知）―

高知県のある山村に住む仁美さん（仮名）は、「農山漁村民宿おかあさん100選」に選ばれており、集落内の各種活動におけるリーダー的存在でもある。この集落は四万十川支流の最も奥部に位置する人口75人程度の山あいの地区¹²⁾であるが、さまざまなイベントの開催によって日頃から多くの来訪者があり、1ターン移住者も4組を迎え入れるなど、開放的な面をもった地域となっている。そのような地区のまとめ役でもあり、活動の中心となっているのが仁美さんであり、農家民宿の開設も、来客を受け入れるこの地区の風土を抜きにしては語れない。

彼女は県内の高校を卒業した後、神奈川県短期大学に進学し、栄養学を学ぶ。在学時は学生運動の盛んだった時期でもあり、彼女も自治会活動を通じてデモによく参加する生活であった。

卒業後の就職も同県の病院を選択し、2年間で過ごす中で、知り合った男性とも結婚する。その際、彼女が2人姉妹の長姉だったこともあり、結婚に際して夫婦の姓は仁美さんの側の名字を選択した。町議会議員をしていた親からは進学の際に「卒業したら戻ってこい」と言われており、2年間の勤務の後に高知市まで戻り、その後はオイルショックの影響もあって集落に戻ることを決意する。帰郷はさほど積極的な選択ではなかったが、夫も不平も言わずについてきてくれ、地元にもすんなりと馴染めたという。

財布は父がもっており、生活面で困ることはなかったものの、自分たちの自由になる金はなく、農業所得もほとんどない状況の中で新たにイチゴ栽培にも取り組んだが（4～5年）、結局は夫婦の森林組合での山仕事で2人の所得の柱という状況であった。外に出かけていくことは自由にでき、仁美さんは実両親に子供の世話を任せてスポーツ活動などで外出を重ねていたという。一方、地域内では古くから地域婦人会の役割が大きく¹³⁾、上の世代にリーダー格の女性が育たなかったこともあって、若い頃から彼女がリーダーとして活動せざるをえない状況であった。

転機となったのは、町議会議員に女性を押し立てようとする動きが出て、彼女に白羽の矢が立ったことである。それまであまり立候補を意識していなかった彼女に対して、政治の場で女性が意見を言う必要があるとして、立候補を勧めたのは夫であった。だが、この時の選挙（1992年：41歳）は僅差で落選する。

Hに参加したのは2度目の選挙挑戦を控えた時期であった。町による農村女性を対象とした事業である「いきいき女性塾」やJA女性部での活動を通じて知り合っていた町内のmさん（農業者）から、全国集会（第2回：1996年）への参加を誘われたのである。仁美さんは集会の中で「夢語り」というプログラムに出場し、「選挙に出て女性議員を目指す」という夢を語り、参加者全員による投票を経て「夢基金」（3名に各10万円）を獲得する。「女性議員」というチャレンジ目標が集会参加者に斬新な目標として受け止められた証であった。同年に行われた選挙で彼女は当選し、その後は4期15年にわたって町議会議員を務めるこ

となる¹⁴⁾。したがってこの期間の仁美さんの活動は、議員活動と地元集落における旧来からの女性組織による活動が主となった。

彼女と集落に大きなインパクトを与える出来事となったのは、「電腦中津川小学校」の登場である。これらの経緯については、発起人の1人であった野崎賢也が詳しく記している。取り組みのきっかけは、120年の歴史をもつ地元小学校の休校（96年3月）にあった。学校が農山村に住む人々にとって心の支柱であることは言うまでもなく、休校は集落の人々に地域の衰退を感じさせる象徴的な出来事であった。ところがこのような事態に対して、地元林家と県職員、京都大学大学院生の3名が、インターネット上で仮想の学校を立ち上げ、年齢や居住地を問わず誰もが「電腦同級生」として登録することで、四万十地方の農林業や生物、伝統工芸などについて学べる仕組みを作りあげる（野崎、1996）。ちょうどこの時期は、日本におけるインターネット・ブームの端緒と重なっており、この「電腦中津川小学校」も新奇さが評判を呼ぶことで、多くの都市居住者の目をこの地域に向けることに成功したのである。

仁美さんにとってこの出来事は、地元の資源を見直すきっかけになった。学校が休校になって淋しさを感じていたところに「電腦中津川小学校」のイベントで外部から人が集落到やってくるようになり、「『空気がおいしい』などと言ってくれることで、自分達には財産があるのだということに気づかされた」のだという。

実はHの「夢語り」においても、「山を介した交流」は彼女のもう一つの夢として語られていた。奇しくもこの集会に参加した直後に「電腦中津川小学校」が登場したことで、交流の具体化に向けた第一歩が始まることになったのである。夏のキャンプや秋の運動会¹⁵⁾に、これまでこの地に縁もゆかりもなかった人々が「電腦同級生」として来訪するのを目の当たりにして、彼女は夫と相談の上で農家民宿を始めることを決意し、2000年夏にログハウスの民宿を開設する。これが評価され、2008年には国土交通省・農林水産省事業の「農林漁家民宿おかあさん100選」（第1回）にも選出された。

なおこの集落では、各種組織の構成員が結果的に重複しており、地域婦人会のように上部団体に対する対応業務が過重負担となっている活動もあったため、それらを整理統合し、地域のための活動に専念するための基盤として「やまびこ会」という組織を立ち上げた¹⁶⁾。会長は代々男性が勤めているものの、女性たちの実質的なリーダーは仁美さんとなっており、議員をやめた後も集落と民宿の仕事で忙しい日々を送っている。

（4）介護をバネにした成長 ―希世子さん（広島）―

Hのメンバーには、前項で見てきたように地縁集団への積極的な参画や気の合うグループの結成を通じて活動を展開する女性たちがいる一方で、このような集団型の活動には向かわない女性たちもいる。希世子さん（仮名）の場合も、地縁型の女性グループへの積極的な関与はみられず、「私が呼びかけて会を結成したことはない」と言うように、明らかに集団指

向型の行動スタイルとは異なる指向性が見受けられる。以下にその実態をみてみたい。

彼女は静岡県にて子供時代を過ごした後、農業および海外にあこがれて首都圏にある農業系の大学（拓殖学科）に進学する。非農家出身ではあったが、親の実家が農家だったこともあり、農業へのあこがれは中学時代から芽生えていたという。大学時代に知り合った農家出身の男性に「自然の香り」を感じたことで交際がはじまり、卒業後すぐに結婚する。

婚家は第2種兼業農家であり、4反の農地ではそばと米・野菜を作っている程度であったが、2人は農業専従でいくことを選択し、栽培品目を模索した結果として夏場のハウレンソウ栽培を試みたところ、これが経済的に成功する¹⁷⁾。80年代に入って着目したのは正月に向けた「春の七草」であり、子供の学校での体験話にヒントを得て、それまでは畑の雑草という認識に過ぎなかった「春の七草」を商品化したところ、これも大ヒットとなった¹⁸⁾。以来、2人の経営スタイルは新たな市場開拓を常に目指すという方向で進められていく。病害虫の忌避効果を狙って植えたハーブ¹⁹⁾が商品になると知ったのもこの頃からである。ちなみに近年の主力作目はベビーリーフへと移っている。このように希世子さん夫婦については経営上の成功話に事欠かず、アイデア豊かで進取の精神に富むところが経営面での最大の特長となっている。ただし以上の展開は「東京農大経営者大賞」受賞（2005年）に伴う論考（山田ほか、2007）でも分析されており、本稿では深入りしない。

そこで考えてみたいのは、Hと彼女との関わりである。Hは基本的に「成功者」や「女性経営者」のためのネットワーク²⁰⁾ではなく、＜農＞の経験と智慧を共有することで生命尊重のできる生活をとるもどす、という結成時の目的からもわかるように、自己と社会の変革を目指す非営利的な活動を目指すものとして発足した（大石、2007：186-187）。そして実際、Hはエンパワーメント（＝自己変革）と「雪印100株運動」のような社会運動（＝社会変革）を展開しており、希世子さんはこのHの創設に携わったのみならず、その後も一貫して運営に関わり続け、Hの中心的人物の1人とされている。このような姿勢は「優秀な農業経営者」という像とは異なる一面として理解する必要があるだろう。

彼女とHとの関わりは、国民年金基金の職能型基金として設立された「全国農業みどり国民年金基金」の設立総会（1991年）において、後にHのリーダーとなる福井県在住の肉牛農家であるyさんと出会ったことに始まる。総会でのyさんの発言内容の素晴らしさに希世子さんが惹かれたことで、2人の交友関係は開始される。その後、さまざまな経緯（山崎、1995）を経てHが結成されるときに、yさんは希世子さんにも加わるよう説得し、これを容れて彼女は実行委員として集会の総会司会を勤めることになる。

ただしこのときの集会は、彼女にとっては役割よりも＜参加したという事実＞そのものの方が意味をもっていたと思われる。なぜならば、94年3月の集会に向けて準備を進めていた矢先の12月に夫が交通事故に巻き込まれ、生死をさまようほどの怪我を負っていたからである。彼女は夫の介護と農園の経営を背負う身となり、正月の「春の七草」の時期を控えて寝る暇さえない事態となった。だがHの設立を目指すyさんは、その事実を知りながら

も「たいへんな時期だからこそ、敢えて出席するという選択もある」と伝え、それとなく出席を促した。そして、夫の容態が安定したことも手伝って、最終的に彼女は全国集会に出席することを選ぶ。それはyさんとのやり取りを通じて、「困難な状況だからこそ、敢えて」という姿勢に共感できたからだという。

限界を乗り越えていくという姿勢は、その後の夫との二人三脚の生活においても、遺憾なく共有されることになる。片足切断および半身不随となりながらも、2年半の病院生活を終えて自宅に戻ってきた夫は、農園代表の座を妻にゆずり、自らは自由な立場から食と農を考えることに専念する。『フルーツひろしま』に連載された手記によれば、夫は頻繁に海外を訪れてはレストランやファーマーズマーケット、農場を巡り、新たな栽培品目や種の入手先を探っており、メキシコではスキューバ・ダイビングにも挑戦し（梶谷・梶谷、2004c）、50歳の年にはナイアガラ園芸大学（カナダ）への留学を通じてバイオロジカル・コントロールをも学んでいる（梶谷・梶谷、2004b）。とても身体障害を抱えている人物とは思えないほどの活動であり、これを支えているのが希世子さんと家族である。

このように希世子さん夫妻は、困難な状況を乗り越えて経営面や生活面での前進を続けており、それらの経験談はHの集会でも頻繁に披露されている。それがしばしば参加者の耳目を集めているのは、経営的な成功談という面があるにせよ、困難な状況を巡る自己変革の物語として含蓄に富んでいる点にも理由があると考えられる。

（5）農園を福祉の場に ―典子さん（長野）―

典子さん（仮名）も前項の希世子さんと同様、Hの結成とその後の運営に深く関わってきた人物である。彼女は長野県内の非農家の生まれであり、高校を卒業後に神奈川の短期大学で学び、保母（現在の保育士）の資格を取得した後、神奈川県職員の職員として就職する。職場は障害をもった小中学生²¹⁾のための全寮制の学校であり、生活指導員として子供たちの日常生活を補佐する仕事であった。彼女は小学生時代に障害児を扱ったテレビ番組を見て深く感銘を受け、それ以来、このような子供たちと一緒に暮らせる仕事への憧れを抱き続けおり、この夢を叶えることに成功したのである。これに加えて、「NHK 青年の主張全国コンクール」を通じて同じく長野出身の男性とも知り合い、結婚も果たす。ところが神奈川での生活が続くと思っていた矢先、次男であった夫が急に家を継ぐことが決まり、典子さん夫妻は職を辞して長野に移らざるをえなくなる。夫の実家は農家であり、思いもよらぬ形で彼女は農業の世界に足を踏み入れることになったのである。

その後の生活は、ただひたすら義父の言うままに農作業を手伝う日々であったという。夫は地元で再就職したため、生活費は給与所得でまかなえたものの、農作業を通じた彼女の所得は長らくゼロという状況であった。転機は約15年間が過ぎ、義父が病に倒れたことで訪れる。夫は依然として勤めを続けていたため、自然と農業経営の決定権が彼女の手に移ることになったのである。手記によれば、彼女はそれまでの水田とリンゴ中心の経営を果樹専作

へと転換し、結実期の異なるサクランボやブドウを導入することで収穫期をずらし、労働力の分散化をはかり、これと平行して来訪者に農園を少しずつ開放する試みを始めている（「ふれあい農園」）。これは、車いすでも入れるように園地を整備した上で、手を伸ばしやすいように果樹の樹高を低くし、ふれ合い動物としてニワトリを農園に放し飼いにするといった形の、障がい・者の受け入れを念頭においた農園作りであった（越、2005）。そしてこの福祉的な取り組みは、2003年に田中康夫長野県知事から「福祉のまちづくりの推進に寄与した」との理由で知事表彰を受けることになる。

個人農園を舞台にした活動を展開する一方で、もう1つの彼女の活動の柱は県内外におけるネットワーキングであった。彼女は地縁型の女性組織とは深い関わりをもたなかったものの、関東地方の農村女性によるネットワークには参加することにした。これは家の光協会のt氏が行動力のありそうな女性に声をかけることで結成されたものであり、典子さんの場合も、彼女が時折行っていた雑誌や新聞（地方紙、業界紙）への投稿がたまたまt氏の目にとまったことがきっかけとなった。このネットワークは、さしあたってバングラデシュに孤児院を建てることへの支援から活動を開始し、バザーの開催による支援金集めを端緒として社会的な活動を行っていく。

後にHの代表となる福井県のyさんが、H結成のために動き始めたのもちょうどこの時期である。t氏はyさんにこのネットワークの情報を伝え、連絡をとるように促した。これをきっかけとしてyさんと典子さん（および後述する聖子さん）が繋がることになり、H結成時の実行委員が次第に揃っていくことになる。

典子さんはHの長野支部の活動にも力を注ぎ、たびたび勉強会や交流会を開いている。「雪印100株運動」のときに長野県で賛同者を組織した際にも、彼女のネットワークは遺憾なく発揮された。日本人初の宇宙飛行士であり、その後に福島県で農的生活にはいった秋山豊寛氏²²⁾を講師に招いた勉強会（「元肥塾」）も、若干スタイルを変えつつ毎年開催されており、学生等の参加者も多い。このように地域の人々や若者に勉強と交流の機会を提供することも、彼女のライフワークとなっている。

（6）食を通じた社会との繋がり ―聖子さん（神奈川）―

聖子さん（仮名）は2004年に果物を用いた食品加工の本を出版した。これはいわば「果樹園発のフルーツレシピ」であり、10年経過した現在でも問い合わせの電話が時折あるほど好評なのだという。加工所と直売所での長年における蓄積を惜しみなく公開している点には、食と農の素晴らしさを多くの人々と共有したいと願う彼女の姿勢が示されている。

彼女が食に強い関心を抱いてきたことは、幼少期に父が亡くなり、小さい頃から農業（養鶏業を含む）を営む母を助けてきたことと深く関係する。朝の学校に行くまでの時間帯に家事を行い、学校に通う自転車に野菜を積み込み、その配達を終えてから学校に向かうといった生活を送るなかで、食に対する興味が自然と培われていったという。親類縁者にはウイン

ドレス養鶏を編み出した畜産農家や、種なしブドウの開発に携わった研究者などもいて、農業の先進的な情報に触れやすい環境にもあった。

高校卒業後は2年ほど実家の農業を手伝った後、兄の友人であった農家の後継者と結婚する。このとき、彼女は得意な料理について、婚家でも腕を振るうことを楽しみにしていたという。ところが、その期待は良い意味で裏切られた。義母は自分でパンを焼き、マヨネーズも手作りするなど、結婚当時（1964年）の農家としては先進的な食生活を実践していたのである。披露宴に出す料理も、義母自身が築地市場にマグロを買い付けにいくなどしてほとんどすべてを1人で取りしきり、聖子さんはもっぱら来客への対応に留まったという。この義母からさまざまな料理を習うことで、彼女の料理に対する関心と技量はますます高まり、後年の加工場建設という流れが生み出されていくことになる。

婚家は古くから果樹栽培に取り組んでおり、軒先販売も行っていた。それと平行して夫は学生時代に乳牛1頭を飼育しており、そこから自身の小遣いを得ていた。結婚したころにはこの乳牛が40頭ほどに増えており、最盛期には70頭に達している。転機は1975年頃に訪れた。農地の周囲が次第に宅地化していき、畜産を続けることが容易ではなくなってきた頃に、義父母が立て続けに亡くなってしまい、家族労働力が一気に減少するのである。聖子さん夫婦はこれを期に酪農を廃業し、果樹作に経営内容を絞り、将来的な直売を見越して少量多品種生産へと切り替えることを決意する。本格的な直売所を建設したのは1989年で、5年後には食品加工施設を追加し、さらに2001年には菓子製造業許可を取得してパンの製造販売も開始した。彼女の後半生は、この直売所と食品加工の仕事を中心に展開されたと考えて良い。なおHとの関係は、典子さんと同様、t氏の呼びかけたネットワークに参加したことがきっかけであり、H設立時からメンバーに名を連ねつつ、参加者に直売と食品加工の知識提供などを行ってきた。

さて以上を踏まえて、聖子さんの特長を2点ほど示しておこう。彼女をとりあげた雑誌記事の中に、シロップ漬けやジャムの加工生産に対する彼女の思いが以下のように披露されている。「他の店からも引き合いがあって、卸してくれといわれるけど、手広くやると味が落ちるでしょ。大量に作るためによその果物も入れるようじゃ、手づくりの良さってなくなるし。自分で作った果物だから加工している。どうせやるなら、こだわっていかないと楽しくないもの」（宿谷、1993）。この発言は、生産規模と品質とが反比例しやすいことを踏まえた上で、高品質のものだけを丁寧に作り続けたいという彼女のこだわりが示されたものとして捉えうる。彼女は加工部門を基本的に1人で担っており、雇用を入れてまで規模を拡大することは行っていない。原材料もネットワークを駆使して信頼のおける生産者から安全性の高いものばかりを選んで調達しており、素性の知れない原料はできるだけ避けるようにしている。単に国産品や有機農産物というだけではだめなのである。むしろこのような方針が可能であるのも小規模な生産スタイルを守っているからこそであり、人気に乗じて販路を拡大することは、彼女のスタイルを根底からひっくり返すことを意味する。

彼女を巡るもう1つの興味深い点は、果樹園の中に多様な動物（豚、羊、山羊、鶏、合鴨など）を放し飼いに近い形で飼育してきた点にある。これは彼女が動物好きであることとも関係しているが、それに加えて、農園に除草剤を播かないという決意表明ともなっている。というのも、これらの動物は草食のため除草剤を播いた場所では飼育することができず、このことを踏まえた上で彼女は敢えて農園で動物を飼育してきたのである。ちなみにこの取り組みは、長野の典子さんがブドウ園にて鶏を飼育している取り組みを参考にしたものであり、このようにネットワークを通じた交流と知識の授け合いが個人レベルでしばしば見られるのもHの特長となっている。

6. 考察

インフォーマントのライフ・ストーリーから判明するのは、Hの結成される（または参加する）以前から、彼女たちは少しずつ問題関心を温め、活動展開のための準備を始めていたという事実である。年齢的には40-50代という子育てが一段落し、親世代からの経営移譲の進む時期に該当する。このような女性たちが、「農村女性ネットワーク」という言葉に惹かれてHに結集し、多大な刺激を受けてその後の活動展開を果たすようになったということは、Hがいわば＜着火剤＞のような役割を果たしたということを示している。本稿が「農村女性ネットワーク」という用語を思想として理解するのも、変革のための衝動を農村女性たちに植え付け、そこから多数の実践が生まれていったという点に基づいている。

このような理解をもとにして、参加者たちが（Hへの参加を含む）変革活動に従事するに際して影響があったと考えられる環境要素と、その後の活動展開の内容をまとめておく（表2）。その上で、変革の指向性の違いについての分類を考えたところ、①地縁集団型、②任意集団型、③ドメスティック型、という3類型を抽出することができるようになる。①は集落や旧町村地区といった枠組みを利用して変革目標を設定するパターンであり、②は気のあった仲間などで経済活動や社会活動などを営むパターンである。①と②の違いについては、もちろん個人的な指向性の差も関係するものの、それ以外に居住地域の環境（都市部 or 農村部）の違いによる影響も大きく、変革に向けた集団の組織方法や活動目標が立地条件によっても変化している様を見て取ることができる。

やや方向性の異なるのは③であり、これは経営体や生活の場を舞台とする変革指向として理解できる。ここでは変革の対象は社会よりもまず自己に対して向けられており、それは時として自己の経営発展とも方向性を同じくする。ただし、それが単なる営利追求に終始するのであれば、おそらくHとは相容れない存在となり、長くHに在籍することには繋がらなかったものと思われる。数少ない事例から断定することは困難であるものの、本稿に登場する希世子さん・聖子さんの事例では、常に自己を高めていこうとするストイックな性格が見

表2 インフォーマントをとりまく環境および活動状況

	氏名 (仮名)	珠美さん	歌子さん	仁美さん	希世子さん	典子さん	聖子さん
家庭での 立場	舅姑関係	義父母とも 厳しい面が あり、直売店 開設後も父 母の農作業 の手伝いを 優先してい た	義父との関 係は良好で、 義母はあま り農作業に は従事しな かった	実両親のた め、自由にさ せてもらえた	義父はおだ やかな性格 で、仕事で 留守勝ち、義 母は厳しい 面があったも の、夫の怪 我を契機に 関係が好転	夫は勤めに 出しており、結 婚後15年間 は無給で義 父の農業を 手伝わねば ならなかった	義父は人のや る気を引き出 す能力に長け ており、義母 も料理に関す る様々な知識 を授けてくれ るなど、極め て良好な関係
	サイフ (およびそ の継承)	義父は生前 はサイフを手 放さなかった が、生活費 は潤沢にもら えた。小遣 いは少ない	結婚して3～ 4年後に譲り 受けた	サイフは父 がもっていた が、生活に不 自由はなし。 自由になる金 は夫と仁美さ んの山仕事 (森林組合) の収入から	結婚してす ぐに「しゃも じもサイフも 渡します」と 言われて移 譲された	義父が病気 で倒れるまで (結婚後15年 間)サイフを 握っていた (夫の給与は 別)	結婚当時から すでに給料制 で年2回の賞 与もあり、す べて自由に使 え、金銭面で 恵まれていた
Hに関して	参加時期	1996(第2回)	1999(第3回)	1996(第2回)	1994(第1回)	1994(第1回)	1994(第1回)
	全国集会 参加回数	5回(96,99,02,05, 13年)	3回(98,05,08年)	2回(94,08年)	8回(94,96,99,02, 05,08,11,13年)	8回(94,96,99,02, 05,08,11,13年)	6回(94,96,99,02, 05,08年)
	参加の きっかけ	第1回に参加 した人の記 事を読んでお り、その後に、 第2回集会の 開催告知を新聞 記事で見つけ て	熊本県農業 女性アドバイザー 在任時に県職員 から開催情報 を知らされて	y氏と知己で あった近隣 友人に誘われ て	農業者年金 の会合にてy 氏と知己であ り、y氏から 実行委員への 参画を依頼された	他の農村女 性ネットワーク にて活動して いることをy 氏が知り、y 氏から実行委員 への参画を依 頼された	他の農村女性 ネットワークに て活動してい ることをy氏 が知り、y氏 から実行委員 への参画を依 頼された
	家族からの 参加同意の とりつけ	初回集会時 には義父母・ 夫に頭を下 げて参加、 直売所開設 以降は自由 度が増す	もともと義父 母・夫ともに 外部で活動 することに寛 容な態度	もともと実親 ・夫ともに 外部で活動 することに寛 容な態度	夫は交通事 故(1993) の後に経営 権を妻に委 譲したため自 己決定できた	義父母の介 護の段取り をした上で自 己決定できた	もともと義父 母・夫ともに 外部で活動す ることに寛容 な態度
	雪印100 株運動	不参加	参加	参加	参加	参加	参加
	NPOでの 役職経験	なし	なし	なし	あり	あり	なし
社会活動	活動およ び役職経験	福岡県女性農 村アドバイザー 福岡県指導 農業士 福岡県農業・ 農村振興審 議会委員 農林水産省 食料・農業・ 農村政策審 議会委員 福岡県男女	JA女性部部长 JA熊本市女 性部副部长 熊本県農業 女性アドバイザー 熊本市認定 農業者協 議会副会長 熊本ツーリ ズムコンソー シウム	町会議員(4 期15年) 食生活改善 推進協議会 会長 婦人会副会長 JA女性部副 会長 いきいき女 性塾	農業委員(3 期9年:地域 初の女性委 員)	関東女の ネットワーク 長野県農村生 活マイスター 須坂市総合 計画審議会 委員(事業 仕分け) 須坂市食と 農の基本計 画策定懇話 会委員	関東女の ネットワーク 神奈川県ふる さと生活技術 指導師 湘南地域女性 協議会会長

		共同参画審議会委員	熊本市農とび事業				
立ち上げに関与した活動		H九州集会(支部大会)直売所「ぶどう畑」農業塾「農業生産法人合同会社みな月」	H熊本集会(支部大会)「フレッシュ河内」(㈱オレンジプロッサム)	農家民宿(農林漁家民宿)おかあさん100選に出地域振興団体「やまびこ会」	広島県女性農業経営者ネットワーク	H長野支部ふれあい農園むかごの会元肥塾劇団ふるさとキャラバン公演会	直売所「ふるうつらんど」加工所「ばあばの手果房」
変革の指向性	地縁集団型		◎ (旧町域)	◎ (集落)			
	任意集団型	◎				◎	
	ドメスティック型			○	◎	○	◎

注1) 変革の指向性については、◎、○、空白、の3段階で強さを表記した
出典：筆者調査結果より作成

られることに加え、得られた経験を集会や本などさまざまな場面で人に伝えていこうとする姿勢があり、このような姿勢をもつ女性たちが③のグループを形成しているように思われる。

最後に触れておきたいのは、鶴（2007）の研究との関連である。鶴はHをとりまく緊張関係として「家との緊張関係」を「高い→低い」、「ムラとの緊張関係」を「低い（→高い→低い）」と判断しており、この分析は参加メンバーの平均値としてみるならば、筆者の認識と大きく異なるものではない。ただし本稿で描いてきたように、Hのメンバーは家庭内外において抑圧状況を強く認識していた者もいれば、逆に比較的自由に振る舞っていた者もあり、その実態は安易な平均化を許さないほど多様である。したがって思想論的にみた場合、抑圧状況とその後の変革活動との関係については、これを一義的に論じるのではなく、抑圧を抱えた者と自由に振る舞えた者のパターンを切り分けるなどして、変革に向けた思想の熟成過程とその影響要因を複数のパターンとして抽出することも重要であると思われる。いずれにせよ鶴が着目した緊張関係という視点は重要であり、本稿では十分に考察することができなかったものの、Hの参加者にさまざまな動機と方向性を有する変革志向が併存していたことを解明する際の大きな手がかりになるものと思われる。これについては残された課題としたい。

註

- 1) このネットワークは2014年に「田舎のヒロインズ」へとNPO法人の名称を変更したが、本稿のインフォーマントは、任意団体時代～NPO法人（旧名称）時代にかけて活動したメンバーばかりであるため、本稿では旧名称を用いることとした。
- 2) 本稿では岩崎正弥（1997：12）の捉え方にならい、単なる思索活動とその言語的な表現内容のみでなく、そこで培われた社会理念や価値観、生活指針が実際の生活と運動の中にどのように投影されていったの

かにも着目し、実践活動も思想の具体的な表現形態であると捉えることとする。

- 3) これは「生活クラブがその『協同組合運動』の主張を地域に反映させるために、地方議会に『代理人』を送り込もうという」運動であり、「生活クラブから自立し、幅広い市民層を結集し（中略）『専門的』組織として」結成され、他の社会運動とも連携・協同しながら地域の課題に取り組むことが目指された（渡辺、1995：181-195）。
- 4) ただし参加するかどうかは任意であり、後には賛同者によって構成されたサブ・ネットワークがこの運動を展開した（やまざきほか、2004）。ただし運動の成果は参加者のみならずH全体にも還元され、全員で共有される形がとられた（たとえば2002年の全国集会）。
- 5) それゆえに、経済状況に関するデータおよびネガティブな人間関係に関するデータについては、記載を省くか簡素化してある。
- 6) 「今の私からは想像もつかないでしょ」という発言もあり、本人にとってもその後の人生には大きな変化があったと捉えられている。しかしながら、直売所では多くの従業員・パートに混じって店頭での接客に励む傍らで、合間を縫って行政などからの委嘱業務も精力的にこなしており、この寸暇を惜しむ労働姿勢は結婚当初のスタイルをそのまま現在も引き継いでいるようにも思われる。
- 7) JA 教育文化活動の成果発表の場として、JA 大会、都道府県大会、全国大会の3部構成で開催されている（一般社団法人家の光協会 Web）。
- 8) H はゆるやかな「農村女性」たちのネットワークを目指しており、地方における活動はHが主導するのではなく、メンバーの独自の展開に委ねられていた。酪農家の女性中心の交流会である「モーモー母ちゃんの集い」も、もともとHのメンバーが提唱して始まったもので、第1回集会は提唱者の居住する兵庫県あわじ市で開催されている。宮崎県で開かれた第7回集会のWebには、過去の開催状況が記載されている（第7回全国モーモー母ちゃんの集い in みやざき Web）。
- 9) JA 全中、JA 都道府県中央会とNHKが主催して、日本農業の確立をめざし、意欲的に経営や技術の改革と発展にとりくみ、地域社会の発展に貢献している農業者と営農集団を表彰している（JA 全中 Web）。
- 10) 熊本市に合併（1991年）される以前の旧町域で、県内有数のミカンの産地でもある。
- 11) この地区が「熊本市農とびあ事業」として指定されたため（計4地区）、2006年度からはみかんの花摘みイベントをこの事業とも連携させている。営利目的の活動というよりは、河内地区の魅力を知って欲しいという彼女の思いが表現された取り組みのひとつとなっている。
- 12) 山崎真弓の調べによれば、集落で最も人口が多かったのは1959年の410人で、江戸期の1743年は123人との記録が残っているという（山崎、2014：42）。
- 13) これに対してJA 女性部は地区には存在せず、より広域の組織となっていた。
- 14) 彼女の当選を皮切りにして、その後のHでは選挙への出馬と当選を果たす女性が続出し始める。
- 15) 農村では小学校の運動会が実質的に地区の運動会を兼ねていることも多く、この地域も同様であったため、小学校の休校は地区の運動会の消滅をも意味していた。
- 16) 統合された主な団体は、運動会実行委員会、青少年育成会、PTA、JA 女性部、地域婦人会、生活改善グループ、びんび祭り実行委員会、などであり、その際に会計も一本化された。従来女性組織によって行われていた活動は「やまびこ会」内部の「女子部」という位置づけに変更された。これらの結果、未統合のまま残されたのは、ほぼ老人会のみとなった。
- 17) 夏場のハウレンソウは、当時の県内シェアの9割を占めるに至ったという（吉田、2001）。
- 18) 出荷量は初年度の1,000パックから始まり、後には100,000パックにまで増大した。それに伴い、正月は「親戚、友人、大学生と30人ほどの人が家に寝泊まり」して作業を行うことが通例となり、「大フェスティバル」であったという（梶谷・梶谷、2004a）。ちなみに現在は「春の七草」からは撤退している。
- 19) 2007年時点で約50種のハーブを生産しており、その出荷先の8割はホテルや専門料理店で占められている（山田ほか、2007）。
- 20) たとえばH 結成の2年後（1996年）に、行政サイドの主導で「全国女性農業経営者会議」が設立されている。こちらは2015年4月に解散となったが、2012年には参加要件を広くした「ひめこらほ」という

ネットワークがやはり行政主導で結成されており、こちらに発展的に継承されたと考えられる。ちなみに両者共に「農山漁村男女共同参画推進協議会」の構成団体である（一般社団法人 農山漁村女性・生活活動支援協会 Web）。

- 21) 当時は比較的障碍の程度の軽い、「伸びしろのある子供」を中心にした学校であったという。
- 22) 福島第一原発から30キロ余りの場所に住んでいたため、2011年3月11日の大震災以降は避難生活を送っている。

引用文献

- 岩崎正弥、1997、『農本思想の社会史 ―生活と国体の交錯』、京都大学学術出版会。
- 大石和男、2007「＜女性＞を乗り越える農村女性 ―ネットワーク活動を通じたオルタナティブへの道のり」秋津元輝、藤井和佐、澁谷美紀、大石和男、柏尾珠紀『農村ジェンダー ―女性と地域への新しいまなざし』昭和堂、177-213頁。
- 梶谷満昭・梶谷きよみ、2004a「はじめまして」『フルーツひろしま』第24巻第1号、34-35頁。
- 梶谷満昭・梶谷きよみ、2004b「変化の時代」『フルーツひろしま』第24巻第3号、34-35頁。
- 梶谷満昭・梶谷きよみ、2004c「夫の海外旅行」『フルーツひろしま』第24巻第10号、34-35頁。
- 香月敏孝・高橋克也、1995「温州みかん高品質化生産の動向」『農業総合研究』第49巻第3号、59-102頁。
- 川久保篤志、2006「熊本市河内町におけるミカン産地の維持とその要因 ―集出荷業者の果たしてきた役割に注目して―」『地理学評論』79巻9号、455-480頁。
- 越信子、2005「果樹園で身障者を癒す農業セラピー」全国土地改良事業団連合会（編）『新しい村作り』116号、16-19頁。
- 榊田みどり、2005「媚びない農業を」『農業経営者』第13巻第11号、8-13頁。
- 榊田みどり、2009「農人伝 新開玉子2」（全国農業新聞12月11日付6面）。
- 佐藤慶幸ほか、1995『女性たちの生活者運動 ―生活クラブを支える人びと』マルジェ社。
- 新開玉子、2014「攻めの『おばちゃんパワー』で夢を実現」『AFCフォーラム』第62巻第2号、11-14頁。
- 鶴理恵子、2007『農家女性の社会学』コモンズ。
- 野崎賢也、1997「こころの学校『電脳中津川小学校』」『インターネットで自然な暮らし』（現代農業2月号増刊）、35号、農山漁村文化協会、126-129頁。
- 原（福与）珠里、2009『農村女性のパーソナルネットワーク』農林統計協会。
- 富士谷あつ子、2001『日本農業の女性学：男女共同参画社会とエコロジカル・ライフをめざして』ドメス出版。
- 山田崇裕ほか、2007「地域を愛する心と世界を飛び回る情熱で新たな需要を創造する」東京農業大学国際バイオビジネス学科（編）『経営哲学が支える企業成長』（バイオビジネス6）、63-91頁。
- 山崎眞弓、2014『農家民宿はこぼの四季 ―四万十町大正中津川のくらし―』南の風社。
- やまざきようこ、榊田みどり、大石和男、岸康彦『雪印100株運動 起業の原点・企業の責任』創森社、2004。
- 吉田光宏、2001『「癒し」の農業』を園芸療法で実践『農林経済』9396号、2-6頁。
- 渡辺登、1995『「主婦」から『全日制市民』そして『生活者』としての『女性』へ』佐藤慶幸ほか、1995『女性たちの生活者運動 ―生活クラブを支える人びと』マルジェ社、175-221頁。

引用 Web（最終閲覧日は2016年1月6日）

- 一般社団法人家の光協会
<http://www.ienohikari.net/kyoukai/bunka.html>
- 一般社団法人 農山漁村女性・生活活動支援協会
<http://www.weli.or.jp>

NHK 日本農業賞 食の架け橋の部

<http://www.nhk.or.jp/nougyou/awards/award2005/03.html>

株式会社オレンジプロッサム

<http://ukko.jp/?mode=sk>

JA 全中

<http://www.zenchu-ja.or.jp/food/prize>

第7回全国モーモー母ちゃんの集い in みやざき

<http://cms.city.miyakonojo.miyazaki.jp/tempimg/130703170040201307031653181f.pdf>

日本農業新聞 e 農ネット [女の階段50年 これまでとこれから 1]

http://www.agrinews.co.jp/modules/pico/index.php?content_id=32242

農林水産省

<http://www.maff.go.jp/j/press/nousin/kouryu/080129.html>

みどり国民年金基金

<http://midori-nenkin.or.jp/about/pensionfundsystem.html>